
幼児の言葉とふしづけ の 即興表現

細 矢 静 子

はどのようなかを調べてみました。

— う た の 場 合 —

一 対 象

五歳児で、昭和三七年度の組七四名中男児一九名、女児五五名。
(以下これをAとする) 昭和三九年度の組七二名中男児二一名、女
児五一名(以下これをBとする) A、Bいずれも三年保育児、二年
保育児の混合組。

二 時 期

幼稚園教育が身につくとき、あらゆる面で、特に獨創性を旺盛に發揮
できると思われる卒業間近の二月。

三 環 境

平素幼稚園では、創造性をのばすために、つぎのようなことに指
導上留意し、特にBグループでは一層力をいれた。

1 あかるい、自由なふんいきをつくるために留意した点

(1) 自由遊びをできるだけ多くとり、遊びの發展につとめた。

(2) 絵画製作では、素材から幼児にくふうさせ、材料(空箱、包
装紙、紙食器、プラスチック容器……など)を部屋のコーナ、
に常時用意して、豊富に与え、幼児が、自由にいつでもつくれ
るようにした。

(3) 各自に自信をもたせるため、それぞれの發達程度や、能力に
応じて、些細なこともほめるようにつとめた。毎月の誕生会に

はじめに

幼児の創造性をのばすことを重視する教育は、幼稚園教育の各領
域から大きな問題としてすすめられています。幼児の創作による
「うた」についての研究は、まだまだ少ないように思われます。私
は、幼児の即興的な言葉と、ふしづけによる「うた」の表現に、ど
のような獨創性があらわれるか、また、これを劇に發展させた場合

は、教師が、その幼児の得意な面をほめ、不得手な面を励ます言葉を書いたお祝いのカードをおくり、みんなの前で発表するなど、友だちの間でも、お互いに認め合うようにした。

(4) 毎日、話し合いの機会をつくり、幼児が、自分の考えを大勢の友だちの前でも発表できるようにした。

2 音楽的に留意した点

(1) 生活習慣の習得に音楽を利用し、いろいろな団体的な動作を、教師が音楽の約束で動かした。例えば、グループごとに和音を約束し、ドミソの和音になったらドミソのグループが動き、ドファラがなったらドファラが動くというように、すべて和音で行動し、これを毎日の生活の場（手を洗いにいく、おべんとう、かえり支度など）に利用した。こうして行動させると、幼児は音感的に成長し、しかも順序正しく動けるので、おし合いへし合いの騒ぎなどおこらない。なお、和音はドミソ、ドファラなど術語を用いずに、つぎのように表現した。かもめ（ドミソ）おほし（ドファラ）おつむ（ミソド）ヨイショ（シレソ）など。また、静止の約束として、シューベルトの子もりうたがなったら、なにをしてもその場で、おねむりの体制で静かにするなど、音楽と生活を結びつけて行動させた。

(2) 日常の会話に、教師がふしづけて呼びかけ、幼児もそれにふしづけて応じ、やりとりをした。

(3) 名曲（白鳥の湖、トロイメライなど）をきいて、絵に表現し

てみた。自由遊びの時は、幼児が、ピアノその他の楽器を自由につかっていたのしんだ。

(5) 以上の他、音楽に合わせてリズム表現したり、合奏したり、音楽劇をしたりしたが、幼児の音楽活動が、たのしく展開されるように、教師は、教材の運び方に心をくばった。

家庭は、中流以上で、女兒は五歳頃には、ほとんどの子どもが、ピアノ、バレエ、日本舞踊など、家庭においても情熱的陶冶をうけている。男児の中にも、ピアノ、バイオリンなど習っている子どももあり、また、自分は習っていないけれども、姉妹などの関係が、かなり影響していると思われる。

四 方法

幼児の即興的に行なう言葉と、ふしづけを録音して、それを分析した。

五 結果

1 参加の態度（表1）

全員の幼児が、たのしんでつくることができた。AよりもBの方が、女兒より男児の方が積極的であった。

2 即興的創造性（表2）

AよりBの方が、言葉も、ふしづけも創造性が強く、男児より女兒の方が、ふしづけが高度である。

二年保育児、三年保育児の差は、時期的な関係から、参加の態度、即興的創造性のどちらにも、ほとんどみられなかった。

参加の態度 [表1] 数字は%

態 度	A		B	
	男	女	男	女
自分からよろこんでする	38	25	43	53
友だちのをきいてからする	12	32	33	35
周囲にうながされてする	31	25	24	32
友だちと一緒にする	19	18	0	0
全 然 し な い	0	0	0	0

即興的創造性 [表2] 数字は%

段 階	A		B	
	男	女	男	女
①言葉もふしも創作である	20	61	70	81
②言葉もふしも創作であるが一部分に今までに憶えていたふしができる	31	15	9	10
③言葉もふしも創作であるが一部分だけふしづけあとはふしにならない	28	9	21	9
④既成の曲に言葉だけつける	5	4	0	0
⑤言葉は創作であるがふしにならない	5	9	0	0
⑥創作のつもりで既成曲をうたう	11	2	0	0

ピアノををじょうずにひく子どもが、必ずしも積極的ではなく、むしろ心配して慎重であったが、つくったうたの型は整っていた。
なお、遊び、絵画製作、おはなしづくりに独創性をあらわす幼児が、この場合も、やはり積極的でおもしろいものをつくったが、普段の生活が消極的な幼児も、案外活発に参加して、思っていたより独創的なものをつくった。

①の例 録音を採譜したもので、総じて調子の低いものが多
い。これは、新しいものを考え考え、つくりだそうとするので
こうした表現になったものと思われる。

②の例 ボルガの舟うたの一部がとりいれられているが、この
場合の、エイコラは、コラ、コラ、と怒る禁止の意味につかわ

①の例

はるにねなる と
こいぬもねこもあそびます
まま まめまきパラパラ
ふくさん ふくさん はいつて ください
おにさんはそとへでて ください

③の例 途中から言葉だけになり、ふしにならなくなった。

③の例の楽譜 (B-flat major, 4/4 time):

スリッパはいて あそんだら
 スリッパのなかのもよりの
 ね ちょうちょうがね な
 にかいた タン タン タン
 タン タン タン といいました

④の例 いわゆるかえうたで、アルプス一万尺のうたのふしに言葉だけつけている。

④の例の楽譜 (A major, 4/4 time):

つみきはなんでもできるよね
 そうだ そうだ ビルディングをつくらう
 ね そう そう もつ と どう きょう
 タワーより おおきくしないかな
 リン リン いぬが おはなしよ
 ニャン こといぬさん ニャン ニャン リン リン
 おうちで ニャン ニャン おそとで ニャン ニャン
 さよなら バイ バイ おうちで またね

⑤の場合も、幼児は、ふしもつけているつもりである。
⑥のなかには、記憶を創作と思つてうたっているもの、また創

②の例

エイコラ エイコラ いたずらしちゃだめよ

エイコラ エイコラ こんどはなにしてんの

③の例

ストーブ ストーブ あったかい どうして

そんなにあったかい それはせきゆが

あるし それはせきたんがあるからだ

④の例

おひさま てーれば ゆきが とけるよ

だんだん なーつが ちかづく さ

③の例 Aは情緒的で、Bは追求的で、くわしくみる態度があらわれた。

表現対象 [表3] 数字は%

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦
自然							
A	9	11	20	4	6	42	8
B	19	6	27	8	6	28	6

②の例
おにいさんは
いばっているよ
いつもおこるから
きらいだよ

③の例
かってきた
かってきた
もけいがかって来た
じどうしゃをかてきた

多かつた。
動物が、A、Bとも多く、次に生活をうたつたものが

(1) 表現対象 (表3)
3 言葉
作の意味をみんなが知らないうたをうたうと解しているものもある。例えば昔の流行歌、きょうもコロケあすもコロケ……などをうたう。

(2) A、Bとも八分音符が一番多くつかわれた。
音域(表7)

主なリズム

2拍子 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 ||

3拍子 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 ||

4拍子 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 ||

用量順位

A 1 2 3 4 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 ||

B 1 2 3 4 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 || 〰 〰 〰 〰 ||

即興的表現には、音域の狭いものが多く、特にAにはBより、音域の狭いことが目立つ。

(3) 音程 A、Bいずれも同音進行、順次進行が多い。

(4) 拍子 A、Bいずれも四分の二拍子が非常に多い。

(5) 主なリズム型及び音量順位

多くのリズム型が用いられ二拍子、及び四拍子ではそれぞれ二〇種以上あったがその中の主なものは上のリズム表のようであった。

以上のように、機会と適当なしげきを与えれば、幼児の全員が「うた」の創作が可能であり、しかも、全体に非常に独創性があり、表現が豊かであることがわかりました。

言葉も、旋律の内容も、わずか二年間の差ではありますが、Bの方が、Aよりはるかに豊かで高度になっていました。時代の流れの影響が、いかに大きく幼児の生活にあらわれるかということがわかります。以前は、幼児のうたの教材には、シンコーペーションなど、ほとんどみられませんでしたが、現在の子どもは、創作の中に、なんの無理もなく、きわめてしぜんに表現しています。これも、テレビなどでうけた、コマーショングのある意味ではよい影響でありましょう。知識の程度、考える力も同様にすすんでいることがわかります。なお、この差については、この他、A、Bのグループの傾向のちがいが、また、Bは特に創造性をのびすように指導上努力したことなど考えられますが、今後、異なった環境の幼児と比較するなど、さらにいろいろの角度から研究をすすめていきたいと考えております。

劇へ発展させた場合

うたの創作で、非常におもしろいものができたので、第二次作業として、劇に発展させてみました。

一 対象

前述のBの組

二 時期

うたの創作にひき続き、二月中旬から三月上旬

三 方法

1 テーマのきめ方は、ひなまつりの集まりに五歳児が劇をすることになったので、子どもたちと相談して、一番希望の多い「みにくいあひるのこ」をとった。

2 「みにくいあひるのこ」について、話し合いをさせたあと、教師が、本をよんできかせた。

3 話の筋をみんなで考えてつくった。

4 場面の設定も、みんなで話し合いできめた。

う たを即興的に創作させて録音した。

6 その録音をもとに、教師がまとめた。場面と場面のつなぎは、日本女子大学の一宮道子教授の指導のもとに、劇の形を整えた。

7 役割も話し合いできめた。

四 結果
1 うたをつくる場合の参加の態度(表1)

参加の態度
〔表1〕 数字は%を示す

態度	男	女
自分からよろこんでする	24	16
友だちのをきいてからする	24	22
周囲にうながされてする	14	42
友だちと一緒にする	0	0
全然しない	38	20

テーマをきめないでうたをつくった場合に比較して、全員が一層興味をもち、より意欲的であった。特に自分からよろこんでする幼児は、いくつもつくり、よろこびも一段と大きかった。しかし、つくろうと努力しても、全然つくれない幼児もでてきた。この傾向は、男児の方に強くあらわれた。

2 自分では、うたをつくれぬ幼児も、友だちのつくったものに興味をもって、すぐにおぼえてうたいたし、たのしいふんいきであった。

3 話の筋に、原作にない、うし、うさぎ、かめ、ふくろうなどが登場して、非常に独創的になった。

4 ゆうぎも、子どもたちのなかで、つきつきと考えられ、活発に表現された。

5 劇につかう、背景や、道具も、子どもたちの間で、積極的につくられた。

6 教師が劇にまとめて、全員で練習した時、子どもたちは、非常によろこんで、わずか三日でおぼえた。

7 おべんどうの時間、帰る時間になっても「もっとしよう、もっとしよう」と教師を困らせた。

8 自由遊びの時、自分たちで交代でピアノをひいて、いろいろの役になって繰り返したのしんでいた。他の遊びのなかにも、劇のセリフ、例えば「おまえはあひるかい？ きたないね」などとしてきた。

9 家の人にも、劇の内容をよく話し、自分で、最初から最後まで、幾回も演じてみせた。

みにくいあひるのこ

ガガ ガガ ガガ ガガ あひるの かあさん

たまごを あたため だっ こして

いつでも ほかほか あったかいたまご

かあさんあひる「はやくいいこがうまれるといいわね」
 とうさんあひる「きっといいこがうまれるぞ、こどもたちのミルクをうしの
 おばさんにたのんでよう」

あひるの かあさん じつと すわって あたため

ているよ — たまごが われるの

を まって いるよ —

ひよこ ピヨピヨピヨ

そのうち たまごが ビーと われた

もうひとつ われた ただひとつ

われなくて おおきいたまごがありました

全員 「一つ、二つ、三つ……九つ」
 かあさんあひる「まあ、みんなかわいいこだわ」
 とうさんあひる「うれしいねえ、おや！ 一つだけうまれないぞ、おおきな
 たまごだね、どうしたんだろう」

かあさん あひるは かんがえる

このたまごは ふしぎだな

つぎに「みにくいあひるのこ」の劇の一部を記す。
 劇へ発展させた場合も、幼児の湧きでるように、ほとばしりである

豊かな表現力に驚きました。また、「うた」も自分たちでつくった劇（今までも、幼児が劇をつくったが、うたは教師の作曲による

ものであった）というよろこびが、こんなにも大きいものかと、今更ながら強く考えさせられました。これからも続けていきたいと思



どうしたんだろ う

このたまごはいしかな

いやいやもっとあたためよ

みにくいあひるのこが生まれる場面省略。

うし 登場。

もうもうおめでとう

うしのおかあさん「おいしいおちちをもってきましたよ」

うしのおとうさん「みんなかわいいね」

おや!

おまえはあひるかい

あひる

ほくはあひるだよ

うし

きたないね

わたしのおちちをのんだら

まとめ

幼児の創造性をのばすために、幼児が、お話をつくれたり、紙芝居をつくれたり、音楽にあわせてリズム表現したりすることは、既になされてその効果は評価されておりますが、「うた」の創作も、幼児の創造性をのばす一方法として今後大いにすすめていきたいと思ひます。幼児の創造性は、多角的にのばすことがたいせつであり、それはまた、子どもにとっても、指導する教師にとっても、すばらしくしたのしいことでもあります。

(日本女子大学附属豊明幼稚園)